

若狭の横穴式石室の源流を探る

宮崎大学教育学部助教授

柳 沢 一 男

1

若狭湾に面した諸地域には、古墳時代中期（おおむね5世紀代）にさかのぼる初期の横穴式石室墳の存在が知られている。5世紀中ごろの上中町向山1号墳、5世紀末葉ごろの上中町十善の森古墳などがそれである。6世紀に入っても、美浜町獅子塚古墳や、高浜町二子山3号墳などのように、この地方に横穴式石室が一般化する以前の石室と考えられる例がある。また5世紀後葉の上中町西塚古墳も、石室規模や構造から横穴式石室の可能性が高い。

ところで近年の調査・研究の進展にともなって、若狭湾周辺から発見されたこれらの横穴式石室が、地域を接する畿内の横穴式石室とは設計・構築原理を異にし、遠く離れた九州地方の横穴式石室に関連することが明らかになりはじめています。

それでは、若狭の横穴式石室はどのような系譜をもち、どのような背景のもとに出現したのであろうか、九州の横穴式石室との関連で考えてみたい。

2

まず若狭湾沿岸地域の初期横穴式石室墳について、要点を記しておこう。

向山1号墳 墳長48mの前方後円墳、横穴式石室は後円部中央につくられ、前方部に向かって出入口が設けられている。石室は遺体を埋葬する玄室と、開閉装置としての横口部からなり、横口部の前面に墳丘外部から石室に入るための墓道が掘られている。

玄室は、長さ3.8m、奥幅2.3m、前幅1.8mの台形プランで、天井部が崩落しているが、高さ1.7mに復元される。床面は一面に川原石の円礫を敷き詰めている。周壁は、床面より60cmあまりの高さまで地山をくり抜いた岩盤をそのまま壁面とし、その上部は扁平な割石を小口積みしている。横口部は、左右に板石を立てて袖石とし、その上に楣石を掛け渡して天井石を受けている。横口部の内側床面には、細長い板石を横石を横位に立てて据えている。石室閉塞は横口部外側に板石を立てかけて行なっている。

この石室で注目されるのは、玄室の周壁構成法である。上記したように、玄室周壁の石積みは床面よりも60cm高い段上からはじまる。これは石積みの下半分を省略したようにみえるが、ある種の九州系横穴式石室をモデルとした意図的な手法と考えられる。

十善の森古墳 墳長約67mの前方後円墳、後円部と前方部に墳丘長軸に直交する横穴式石室がある。後円部の石室は、玄室が長さ4.2m、奥幅2m、前幅1.25mと横口部に向かってしだいに幅を狭めた台形を呈する。天井までの高さは2.5mである。横口部は、左壁が側壁からわずかに突出した立石、右壁が側壁から切り離れた状態で内側に立石を立てる。周壁は、奥壁下部に大型の腰石を配するが、側壁はあまり顕著でない。使用石材は全般に大型で、上部を内側に持ち送り、3

石からなる天井石を受けている。横口部前面の構造はよくわからないが、天井を架構した羨道を接続することはなく、掘り込み墓道であったらしい。横口部の閉塞は、袖石外側に大型石材1石を立てて行なっている。

前方部の横穴式石室は右片袖（入口方向からみて）の玄室とその前面に短小な羨道状の石組が付設されたもの。玄室は小型で、長さ1.6m、奥幅1.45m、前幅1mと、これも台形状のプランである。天井までの高さは1.4m。周壁は上部の持ち送りが少なく、全体に箱形の断面形をなす。下部に大型石材を横位に立てた腰石を据え、その上に転石を積み上げて2石の天井石を受ける。

獅子塚古墳 墳長約34mの前方後円墳、横穴式石室は後円部中央にあり、墳丘長軸直交より若干斜めに開口する。玄室は、長さ4.5m、奥幅2.5mだが、前幅2mとやや前方に向かって幅が狭まる。周壁は最下段に腰石を配し、その上部に塊石を積み上げている。天井部は破壊され、天井までの高さは不明である。横口部は、左右に板石を立て、その間の床面に框石を配する。横口部前面は天井石を架構した羨道がなく、石組の側壁を備えた墓道が接続する。石室の閉塞は横口部前面に塊石を積み上げて行なっている。

二子山3号墳 墳長26mの小型前方後円墳、横穴式石室は後円部の墳丘中段にあって、前方部と反対方向に出入口が開口する。玄室は長さ4.5m、奥幅2m、前幅1.8m、天井までの高さは1.7mと推測されている。横口部は左右に立石を立てて袖石とし、上部に楣石を架構する。玄室周壁は、最下段に腰石を配し、その上部を塊石で積み上げる。天井石は崩落していたが、4石が確認されている。横口部前面には天井を架構した羨道がなく、側壁状の石組をもつ墓道が接続する。石室の閉塞は、横口部前面に木板をあて、これに沿わして塊石を一重に積み上げる。

西塚 脇袋古墳群のひとつ。墳長67mほどの前方後円墳で、石室は後円部中央に位置し、墳丘長軸にはほぼ直交する。これまで堅穴式石室とされてきたが、はたしてそう断定できるであろうか。

石室は幅1.27m、長さ5.46mと狭長なプランで、天井までの高さは平均して1.5mであったという。東の短壁（奥壁）は下部に幅1.64m、高さ1.2mの大石を立てた上にこぶりの塊石を、側壁は下部から塊石を積み上げたもので、西側の短壁は、立石であったと報告されている。

この報告だけでは即断できないが、石室の構築に墓壙をとまなわれないことや、石室規模や周壁構造、床面に小さな礫を敷き詰めている点などから、堅穴式石室と断定することはむずかしい。立石があったとされる西壁が問題だが、この部分が横口部として開閉可能な構造であった可能性がある。

これらの横穴式石室は、次のような構造的特徴をもつが、なによりも若狭の場合、初期横穴式石室を採用した古墳がすべて前方後円墳でしめされるように、まず首長墳に取り入れられたことが大きな特徴である。

- ① 玄室と墓道部からなり、天井石を架構した羨道部を接続しない
- ② 横口部は、側壁面よりも石室内に突出するように板石ないし大型の石材を立てて袖石とし、両袖型をなす
- ③ 玄室周壁の下部には、大型の石材を横位に立て並べた腰石を配する

④ 石室閉塞は、横口部前面に大型の板石を立てて行なうが、年代が新しくなると、塊石を用いるようになる

これらの横穴式石室構築の特徴は、いずれも玄界灘沿岸ないし有明海に面した九州北・中部の石室に共通する。次に九州系横穴式石室との関連をみてみよう。

3

日本列島で最初に横穴式石室を採用した九州地方では、4世紀末葉頃、まず玄界灘沿岸部の首長墳に横穴式石室が出現した。玄界灘沿岸部の横穴式石室は、玄室が長方形プランと複数の天井石を水平に架構する特徴をもち、北部九州型と呼ぶ。これにたいして、5世紀前葉になって有明海沿岸に面した熊本県一帯に、玄室が方形基調プランと石障配置および穹窿天井を特徴とする石室が登場し、これを肥後型石室と呼んでいる。また横穴式石室の成立にともなって、在来の堅穴式石室のなかに、一方の短壁を出入口に利用できるように開閉装置を設けた石室があらわれ、この一群を堅穴系横口式石室と呼びわけている。

北部九州型石室は、初期の階段には短小な割石積みの羨道を接続したが、5世紀前葉にはこの手法を放棄して、入口部の左右に板石を立てて横口部を構成する簡略形を成立させた。

また北部九州型と肥後型が接する有明海北・北東部＝筑後・肥前の地域では、この両者の石室の特徴を合わせもつ特異な形態の横穴式石室を案出した。ひとつは、北部九州型の玄室に肥後型の石障を組合わせたもの、いまひとつは肥後型玄室の方形基調プランと、穹窿形でないが天井石1石構成をとるものである。これらを筑肥型と仮称し、前者をA、後者をB型としておこう。

5世紀後葉になると、前方後円墳に採用された北部九州型石室は、その位置を後円部中央の頂部から墳丘側面に移動し、開口方向も墳丘側面ないしくびれ部方向のものが多くなった。そして玄室周壁下部の腰石採用、使用石材の漸次大型化と、墓道と玄室の境の段解消の方向をたどった。末葉以降には、楣石上の前壁拡大化がしだいに進み、使用石材は割石から塊石へと変化する。

九州系横穴式石室の形態が大きく転換したのは、玄室の前面に天井を架構した狭長な羨道部が接続する手法の出現である。それは6世紀前葉でも中ごろに近いところで、年代の遅速はあるが、畿内系横穴式石室を含めて全国的な傾向であったといえるであろう。

このような九州系横穴式石室の推移と、6世紀前葉までの若狭湾沿岸地域の横穴式石室を比べると、基本的な石室構造の推移がほとんど一致することがわかる。では若狭の初期横穴式石室が、具体的に九州系横穴式石室のどの系譜とつながるのであろうか。

まず、若狭の横穴式石室のうちもっとも古い向山1号墳の石室は、筑肥A型の変容形と推定される。玄室周壁の壁石が中位からはじまる特異な構成法は、おそらく下部の地山開削壁面を石障に見立てての発案であろう。それは、玄室床面に石障を配置した石室の周壁構築手法に等しいからである。ところで筑肥A型は、多少アレンジされながらも、岡山県千足古墳・三重県おじよか古墳などに採用されている。これらはいずれも5世紀前葉から中ごろの古墳と推定され、向山1号墳を含めて、筑肥A型の西日本諸地域への波及時期がある程度かぎられていることは注目されてよい。

十善の森古墳の後円部石室は、はやくから九州系横穴式石室との関連が指摘されてきたものである。玄室平面プランがやや変形しているが、全体的な石室構造は5世紀末葉前後の北部九州系ときわめて類似する。福岡県京都郡苅田町の番塚古墳や佐賀県佐賀市関行丸古墳などの石室がもっとも近い例であろう。前方部の石室は片袖型である。おそらくこの当時すでに成立していた畿内系横穴式石室の影響を受けたと思われるが、周壁の腰石は九州系の基本構造のひとつであり、両者の特徴を合わせもった在地での発案形態であろう。

獅子塚・二子山3号墳の横穴式石室は、石室閉塞の塊石積み上げ手法が九州系と異なるが、全体的な石室構造は6世紀前葉の北部九州系石室となら変わらない。この時期の石室調査例が少ないが、福岡県春日市赤井手古墳石室がもっとも近い例である。

西塚古墳の石室は、さきに堅穴式石室でなく横穴式石室の可能性があると述べた。石室が報告どおりの構造と規模であれば、堅穴系横口式石室の可能性が大きい。とくに、短壁の東壁に大型の石材を立てる手法は、畿内周辺の堅穴式石室には例外的であり、むしろ九州系の堅穴系横口式石室に一般的である。さらに入口部と推定される西壁が立石であったことからみて、観察者が左右の袖石を見落とししたか、袖部を構成しない構造の横口部であったと思われる。しかし問題がないわけではない。九州系の堅穴系横口式石室は、大型の北部九州石室が大型首長墳に採用されたのにたいして、中・小型古墳ないし大型墳の従属的埋葬施設に用いられるのが一般的だからである。今後の問題としておきたい。

以上のように、これらの横穴式石室は、九州系横穴式石室がほとんど変容することなく若狭の地に出現したものとみてよい。いいかえれば、若狭の横穴式石室は九州から直接の波及によって成立したのである。いうまでもなく、横穴式石室は運搬可能な品物ではない。石室の構築過程は複雑で、一定の技術体系が必要である。このことは横穴式石室の初期の波及が、構築技術をもつ工人集団の移動によって行なわれたことをしめす。一方において当時の工人たちは、職掌集団として地域首長に統括されていたと考えられるから、おそらく首長の命によって派遣されたのであろう。そして若狭の初期横穴式石室の形式が、それぞれの時期の九州系横穴式石室と等しいことは、古墳造営のたびに工人集団が派遣されたと考えられる。

それでは、若狭の首長層が九州系横穴式石室を採用した契機はどのような事情によるのであろうか。畿内系横穴式石室が全国的に波及するまでのあいだ、九州系の横穴式石室を導入した地域は、若狭・吉備・志摩・和泉、そして九州系との関連が大きい紀伊など少なくない。しかし、地域の首長墳に採用したのは若狭・吉備・紀伊であり、これらの地域首長は5世紀代の大和政権の朝鮮半島進出に関連した氏族であったといわれている。北部九州の氏族は直接文献上に登場しないが、弥生時代以降の太いパイプをもって、進出に大きな役割を果たしたであろう。おそらくは、そうした過程での直接的な接触により、氏族間の婚姻などを介して擬制的な同族・同盟関係を形成した可能性がたかい。きわめて保守性が高い墓制のなかで、特異な埋葬施設の導入は、このような同族・同盟関係を背景に行なわれたのではあるまいか。